
桜舞散る季節.....

究極神団・零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞散る季節……

【Nコード】

N0534S

【作者名】

究極神団・零

【あらすじ】

これは、病弱な少年と、一匹のポケモンとある物語……

人×ポケモンです。そういったのが苦手な方は回れ右を推奨します。

(前書き)

この短編は、欲望に駆られてひたすら自分の妄想を書きなぐっただけのものです。

200%の妄想で出来ています、しつ注意下さい

……重要なのは最後の方だけだったり

それは……ある雪の降る日の事だった。

ポケモントレーナーでもない、なんの取り柄もない、普通の少年の僕、白龍ましろ たつは今日ものんびりと過ごしていく 筈だった。

僕は生まれつき身体が弱く、酷く病弱で、ポケモントレーナーになるのに必須条件とも言えるものの一つ、体力が最悪だった。でも、ポケモンに関しての知識だけは誰にも負けはしないと思ってる。さつきも言ったけど、病弱な僕は、暇な時間が嫌という程あった。そんな時間をただただ過ごすのなんて勿体無いので、その時間を読書に費やした。勿論、ポケモンに関しての本だ。書いている内容全てを暗記するぐらい、何度も本を読み返したりした。

だけど、そんな有り余った知識も、今現在発揮すらされてはいない。子供から大人になった僕は、子供の頃よりかは病気に耐性があったが、結局病弱なのに変わりは無かった。でも、一人で暮らせるぐらいにはなっていた。

今日、家の暖炉に必要な木材が無くなってきたので、近くの森林へ木材を探しに来た時の事だった。

何時もなら、ポケモン達が現れては木材探しを手伝ったりしてくれるのだが、今日に限って、誰もいないのだ。森林の雰囲気も違いきる。……おかしい、と思いつつも、僕は歩みを進めていく。

そうして、何分から歩き続けた時だった。目の前に、白い大きな物が現れた。

「……………な、なんだこれ……………」

それはホントに大きく、白い為に目立つに目立っていた。

よくよく見ると、時々だが、モゾモゾと動いている。ぐるりと回り込んでみると、大きな尻尾みたいなものがあった。僕はその尻尾に見覚えがあった。予想を確証に変える為に、僕は更に回り込む……必要は無かった。

白い大きな物は、僕の気配を感じたのか、自らその巨大を動かし、僕の方を見る。

純白の大きな身体。

大きな二つの翼。

翼龍のような姿……。

間違いない。この白い大きな物は、伝説のポケモン、はくようポケモンレシラムだ。

普通なら、その大きすぎる存在感に怯む所だけど、今の……特に今日の僕は普通じゃなかった。レシラムと確信するや否や、手に持っていた木材を全て放り出し、ゆっくりとレシラムに近づく僕。

レシラムはそんな僕とは逆に、僕に、自分に近寄るな、と言わんばかりに威嚇をしてくる。一瞬怯んだけど、その瞬間、レシラムに苦痛の表情が浮かんだ。どうしたんだろう？　と思い、近付くと、脚の辺りから血が滲んでいた。その血は、純白の身体を、徐々に紅く染め上げ、汚していく。しかもよく見れば、身体にだけではなく、足元にもかなりの血が溢れていた。それを見た瞬間、僕は家に急いで走り出した。身体の弱い僕はどこにこんな体力があるんだ、というぐらい、全速力で、休み無しで走り、救急箱を手に取り、レシラムの元へと走り出す。

息は絶え絶えで、それでも、力を振り絞って、まだ走る。身体が悲鳴をあげるが、僕はそんな悲鳴を無視し、やっとの思いでレシラムの元へと辿り着く。傷口と思わしき場所に消毒をし、痛まないように、ゆっくりと、血を拭き取り、包帯をきつくないように巻いてい

く。時々、レシラムの表情を伺うと、驚いたような表情でずっと僕を見ていた。
そして、包帯を傷口に巻き終わると、レシラムにっこりと微笑みかけた時、僕の身体は遂に限界を迎えたらしく、僕はふっ、と意識を手放した。

どれくらいの時間が経っただろうか、もう時間なんて分からない。とりあえず疑問に思うのは、外で気絶した筈なのに、全然寒くないという事。だけど、そんな疑問よりも、謎の睡魔が僕を襲う。その一番の原因が、僕の耳に心地よいリズムが、耳から身体に入っているからだと僕は悟った。眠気をこらえて、ゆっくりと目を開くと、そこには、僕の顔を覗き込んでいるレシラムの姿が映った。僕が目を覚ました事を理解すると、心配から安堵の表情へと変わる。可愛いなあ……、と思いつつ、その表情に見とれていると、

『……いきなり倒れるから、心配したではないか。』

何処からか、聞いた事の無い、凜とした威厳のある声が聞こえてきた。僕は、その声の正体を探る為に身体を起こす。だけでも、辺りを見回しても、誰もいない。

『…………何を探しているのだ…………？』

誰もいないのに、また聞こえてくる。

まさか…………。

「…………も、もしかして、君が？」

『そつだ。先程から、ずっと私が話している。』

声の正体はレシラムだった。よくよく考えてみると、何処か脳に語りかけてた気がしないことも無かった。テレパシーで僕に語りかけていたのだった。

『寧ろ、私以外にはいないと思うが…………』

「そ、そつだよね…………。あ、あはは…………」

正直言うと、今の僕は気が気で無かった。

そもそも、ポケモンと触れ合う事が多くなかったから慣れてないし、こんな風にポケモンと語り合うのなんて、論外だった。更に言えば、相手が伝説のポケモンだ。平然という事は不可能に近いのだから。

『…………どうしたのだ？ 声が震えているではないか。』

だって…………ポケモンと触れ合う事はあまり長く出来ない身体だし、多くのポケモンに出会う為に旅に出れる体力もない。ポケモンに関する本を読みながら、このポケモンと出会えたらいいな、と夢見たそのポケモンと出会っているのだもの。声だって震えるぞ。

『…………熱でもあるのか…………？』

そんな事を考えていると、レシラムが自分の額と僕の額を合わせてきた。

ああ、もうだめだ……

色んな気持ちがオーバーフローを起こして、またもや僕は意識を手放した。

本当に可笑しなものだ。

威嚇をする私に怯まず、傷を手当てしてくれただかと思えば気絶し、起きて私と少々会話をしたかと思えば、また気絶をし……。

私を助けてくれた人間を放っておく訳にもいかないので、私はその人間を抱き、自らに宿る炎の力を使い、寒く感じないように温度を調整する。

『……………』

私は、暫くこの人間の顔をみる。実を言えば、この人間の顔に見覚えがあったのだ。

それは数十年ぐらい前だ、その日もまた、今日と同じく、雪の降る

季節だった。私は、ただじっとしているのにも飽きたので、空を飛んで散歩をしている時の事だった。外に出て、クマシユンやバニリツチ、バオツプ等の沢山の者と遊んでいる人間達。だが、そんな人間達の隣で、一人だけ、寂しく建物の中で、誰かと交わる事もなく、退屈そうに外を眺めている人間がいた。その様子が気になったので、私はゆっくりと、誰にも気付かれないように、その建物の近くに降りた。辺り一面に雪が積もっていたこともあってか、カモフラージュは完璧だった。私は窓から、顔を覗かせる。外に出ている人間達よりも厚着をし、一人淋しく、外を眺めたり、本を読んだりしていた。そこで私は聞いてしまった。その人間の身体が弱い事を……。

その、身体が弱い人間と、ほぼ同じ顔付きをしていたのだ。

『……間違いない。』

私は、決まった確証もないのに、心のどこかで確信していた。あの時の人間であると……

それと同時に、私の心が、再びあの感情を呼び覚めます。

「う、ん……」

どうやら目を覚ましたようだ。その仕草が可愛かったので、思わず私は頬を撫でる。

「ふあっ……?」

……反応も可愛いとは……。いかな、ちょっとそそり……なんでもない。

「れ、レシラム……？」

にんげん……いや、彼は、私を不思議な表情で見つめる。何が起きたかわかっていないようだ。

『どうした……？』

「あ、いや……もう傷は大丈夫なのかな、って」

嘘だな……。何より目が泳いでいるが、ここは見なかった事にしておこう。

『動かしたりすると、少しだけ痛む程度だな……。』

なんて言っているが、本当は嘘で、動かさなくても痛い。まあそれもそうだろう。突然の凶弾に襲われたのだから……。犯人すらわかってわいないが、心の何処かでこの凶弾に感謝している私がいる事がわかる。怪我をしたおかげで、また彼と、フフフ……

ホントに大丈夫なのだろうか？

僕は目の前で、急に妖しい笑みを浮かべているレシラムが、ちょっ

と怖かったり、ちょっと不思議だったり……複雑な心境だ。
ただ、このレシラムを見てみると、子供の頃を思い出す……。

本人は隠れてるつもりでも、毎日僕の事を見に来ていた。けれども僕にはバレバレで、レシラムに気付かれないように時々、目線をレシラムに移してたりしていた。

その時のレシラムに思えて、仕方がなかった。確証はないけれど……

『……しかし、いくら手当して貰ったとはいえ、暫くは大きく動けないな……。』

「そ、それじゃあさ……。」

『?』

「ぼ、僕の家に来ない……?」

……あれ? 何を言っているんだろう僕は……。

『……ふむ、お言葉に甘えさせて貰おう。』

僕はこの時気が付かなかった。レシラムが妖しい妖しい笑みを浮かべている事に……。

これは運なのか、彼の家に住ま……養生させて貰う事となった。私の心は、高く大きく鳴った。

道中はどうしたかなんて野暮な事は聞いてはいけない。

「せ、狭い所だけど……」

なんて彼は言っているが、何処が狭いのか私には分からない。何故なら、私が入っても十分にスペースが広いからだ。

『広いじゃないか……。』

「そ、そおかな……？」

『そうだ。』

……いかん、話が止まってしまった。ここは……よし、

『……時に、名はなんと云う？』

「名前？」

『そうだ。暫くは一緒に暮らすのだから、名前ぐらいは知らないとな』

「えっと……白龍って言います……」

白龍か……。良い名前だな……

『私を表しているような名前だな……。』

「え、あ……」

『私は気に入ったぞ、龍。』

「あ、ありがとう……」

照れているな。頬が赤く染まっているのがよくわかる。

……ぐう……

「……あ……」

『……』

空気を読まない腹の虫の音が、この部屋一面に響き渡る。

龍は恥ずかしくなったのか、更に顔を赤く染め上げ、あたふたする。そんな様子に、私はクスクスと笑ってしまう。

「わ、笑わないですよ……！」

『フフ……すまない。つい、な……』

まあでも、私もお腹が空いてきた頃だ。丁度よかった。

『龍の腹の音を聞いて、私もお腹が空いてきたな……』

「じゃあ何か作るっか？」

『ああ、頼む。』

龍は張り切って、キッチンへと向かって行く。その様子は、とても身体が弱い事を何一つ思わせない。それになにより

『……随分と……かっこよくなった、な……』

私の漏らした独り言は、誰にも聞かれる事もなく、床に溶け込んでいった……。

「さて……何を作ろうかなあ」

今日の料理は、何時も以上に気合いが入る。何故ならレシラムがいるからだ。

「……聞いておくべきだったかな……。」

自分しかいないキッチンで、苦笑いを浮かべながら冷蔵庫の中を探る。肉、野菜、卵、魚……いつの間にこんなに沢山買い込んだのだろうか？ それともあまり使わなかったからかな？ そんな疑問が浮かんできたが、自分の腹の虫が考える事を中断させる。

「ありったけ……作ってみるとするか……。」

冷蔵庫の中にあつた食材を全部引き出し、調理を始める。普段、自分一人で、しかも僕は少食な方だから、ちゃんと作れるのか不安ではあつたけど。

「さてと……頑張りますか！」

そう意気込んで、僕はまず野菜から切りにかかるのだった。

彼……いや、龍がキッチンに向かってからどのくらい経ったのだろうか？ 香ばしい匂いが、キッチンから漏れ、私の顔の近くに漂ってくる。その匂いを嗅ぐと、余計にお腹が空いてくる。

『……まだ……出来ないのかな……？』

料理、というものを普段から気にした事がなく（野生だから当たり前なのだが）、当然の如く、料理の知識など、私には一辺の欠片もない。だから、どんな料理があるのかも知りはしない。

料理の事ばかり考えていたからなのか、気が付けば、私のお腹から大きな音が鳴り響いていた。……今、この場に龍がいなくて、本当によかったと思う。私だって、伝説のポケモン以前に……一匹の、普通の、雌のポケモンなのだから……。

それに、彼がいない、彼の姿が見えないのは、ちょっと淋しい……。

そんな事を考えていると、彼が料理を運んで来た。瞬間、私は料理……ではなく、彼の顔に釘付けになった。ソースやケチャップが跳ねて附着した事に気付いていなさそうな、彼の顔に……。

「? なに笑ってるの……?」

彼に指摘されて、私は知らない間に笑っている事に気付く。彼の顔を指摘すると、漸く気付いたらしく、顔を真っ赤に染めて、汚れを落とすにいった。

『……普通は気付くと、思うがな……。』

私は、ポツリと、独り言を呟いた。

今は、レシラムと一緒に食卓を囲んでいる。さっきの事があって、笑われたくない僕は、中々レシラムを見ることが出来ない。

『それにしても……、ホントに美味しいぞ。』

「ん、そあ? 不安でいっぱいだったから……よかったよ。」

でも、味は気に入って貰えたみたいだし、僕としてはかなり満足している。だって本当に不安でいっぱいだったから……。美味しく無かったらどうしよう、とかね……。

気付けば手が止まっていて、急いでその止まっていた手を動かす、

料理を口に運んでいく。

暫く時間が経った所で、漸く食べ終える事が出来た。レシラムは既に食べ終わってみたいだけだ。

「ふう、ごちそうさま。」

もうお腹に何も入らないや……。

『……こんなに作らなくても、よかったのだが……。』
「？」

レシラムが何か言ってみたんだけど、僕には聞こえなかった。でも、変わりに良いものを見付けた。

……レシラムの口の横に、ソースが付いているのを。

僕は、先程の仕返しをと言わんばかりに、それを決行した。

「ねえレシラム……。」

『……どうした？』

「……ちよつと顔、寄せてくれない……？」

『？ わかった……。』

了承はしたものの、僕の真意を全く理解出来てはいないみたい。

「……ここにソースがついてるよ。」

『……！』

耳元で、ぼそつと指摘しながら、口元に付いたソースを指で拭き取る。更に其を口に含む。

予想通り……、ではなく、予想以上に、レシラムは過剰に反応していた。

『な、な、な……!!』

ひたすらに、“な”を連呼して、顔を真っ赤に染めていた。

「どうしたの……？ ソース付いてたから、取ってあげただけなのに……？」

『え、あ……、その、だな……』

「？」

『……あ、ありがとう……。』

ぷい、と横を向き、顔を赤く染めたまま、僕にお礼を言うてくる。あまりにも可愛かったので、僕も自然と、顔が赤くなっていくのを感じた。

「……」

『……』

それから暫く、沈黙が続いた。僕はもう収まったけど、レシラムは依然として、顔が赤いままだ。ただ違うのは、先程からずっともじもじしている事だった。

『……な、なあ……』

この空気に耐えられなくなったのか、レシラムが言葉を発する。

「なあに……？」

『……そろそろ、寝ないか……？』

「うーん……」

ふと、レシラムにそう言われたので時計を見る。……針は夜の10時を差していた。外も、黒い世界に変わっていた。部屋の電気は、いつつけたのかはもう覚えてはいない。

「……じゃあ、もう寝よっか……。」

『……それで、だな……』

レシラムがもじもじしながら、何かを言いたそうにしている。どうしたのだろう？

『……い、一緒に、寝てもいいか……？』

顔を真っ赤に染めて、僕にそう言ってきた。僕は思わず「……うん」と返事をしてしまった。

そしてそのまま、僕とレシラムは寝室へと向かった。

気恥ずかしさからか、「おやすみ。」と、一言だけ交わし、僕とレシラムは、寄り添いながらベッドの上で眠っていて、深い夢の中に落ちていた……。

それから、もう毎日が楽しかった。

色んな話をした。レシラムがどんな場所を見て回ったとか、人間にはこんな習慣があるだとか、自分達の過去とか……。その時はお互い、ホントにびっくりした。食事に関しては、レシラムが少なくとも大丈夫だと言ってくれたから、食費が嵩む心配も無くなった。夜になれば、ベッドで、二人一緒に眠りにつく。そんな毎日を繰り返したある日。

レシラムの足の傷もすっかり治った頃、レシラムに『見せたい場所がある』と言われて、レシラムと一緒にその場所に向かった。

そこは、沢山の桜の樹が立ち並び、その美しい花びらを散らす、幻想的な場所だった。

『……龍と出会ってから、かなりの時間が過ぎた。』

ふと、レシラムが語り出す。

『最初は興味本意だったが、何時しか、龍と過ごす日々が、私の中で、楽しくなって、かけがえのない日々になっていった……。』

僕は黙って、その話に耳を傾ける。

『……これからも、ずっと、命尽きるその時、その瞬間まで、……私の傍に、いてくれないか……。？』

それはもう、突然の告白だった。そんな予感はいっていたけど、心の準備なんて出来ている弾も無かった。

『……返事を、聞かせてくれ……。』
「……」

僕の頭の中で、楽しく過ごした日々が、次々再生されていく。

「……返事の前に、ちょっとだけ、言わせて……」

レシラムは、ゆっくりと小さく頷いてくれた。

「僕は、病弱で、君からみたら、直ぐに死んでしまうような存在だ。だけど……、君と過ごした日々は、本当に楽しくて、生き甲斐のあるものだった。」

レシラムが、真剣な眼差しで、僕の瞳を見つめてくる。

「……今では、昔よりかはマシにはなったけど、この、桜の花びらのように、僕の命は、散ってしまうかもしれない。だからこそ……」
もう、僕の意味は、決まっていた。

「だからこそ……、僕の傍に、ずっと、いて欲しい。」

その瞬間、散っていく花びらが、全て大きく舞い上がった気がした。レシラムは、嬉しそうに、満面の笑みを浮かべている。

『……ああ、私は、ずっと、命尽きるその時まで、龍の傍にいる事を誓おう……。』

「うん……。僕も、誓うよ……。」

その日は、桜舞散る、恋の季節だった……。

(後書き)

楽しんで頂けましたかな？
まさかこんな文字数になるとは……正直な所、思いもなかったと
いう

さて、今回の主人公の一人、白龍君……。

実は昔の自分をちよいと弄くった姿だったり
プライバシーな話なんです、実は昔は少し病弱でした。今は違
いますがw

そして……生まれた頃なんで、記憶にはないんですが、その生まれ
た頃に、腎臓を悪くしたらしくって……、今じゃそんな面影はあり
ませんが、ある意味、死と隣り合わせな状態だったりします。あ
まり気にしてませんけどね

まあそんな話とはかく……、こんな妄想200%の小説で、楽し
んで頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0534s/>

桜舞散る季節.....

2011年10月9日20時30分発行